

位の実質化は必要です。また、授業料を負担する保護者の立場からも、単位が実質化されていることが当然期待されるはず。当事者の学生にしても同じことです。在学中はのんびりしている学生も、卒業後には「やっぱりあのとき……」と思うことがあるようです。単位の実質化に取り組みましょう。

8. 授業のルールはしっかり書きましょう！

この授業はある程度の学習歴を必要とするのか、必要とする場合は「受講生に求めるもの」に明記しましょう。その他遅刻や欠席の扱い、授業中の飲食、携帯電話の使用などルールを決めて明記しましょう。

出席を採るのに代返 OK、出席確認後すぐに退出して OK、授業時間中だべってても OK、ゲームで遊んでも OK……。最近の学生は、このような他人の「ずるい」行動が気になるようで、全体のモチベーションを下げています。評価の公正と学生のやる気を持続させるためにも、あらかじめシラバスの中でルールを設定し、公開しましょう。また厳格に対処しましょう。

●不正受験のトラブルが増えています

最近、会議での代返や不正受験に関する議事が増えています。ついやってしまったために1学期を棒に振ってしまう学生も不幸です。「不正受験について」どのように処罰されるか、どのようなときに不正受験とみなされるか、あらかじめ通知しておきましょう。小テストと言えども評価に加える場合は正式な試験です。机の上に出しても良いもの、出してはいけないもの、携帯やノート類の始末など事前に通知しましょう。

9. 教科書は買ったけど一度も使わなかった？

教科書は自分で勉強するためのものです。が、最近の学生の中には、授業中に開かせたり読ませたりしないと全く使わない者がいます。しかも、それを教員のせいにし、授業改善アンケートでも採ろうものなら、きつくきつく非難をします。教科書はもとより、参考書やその他の教材は「何を使うか」だけでなく、「何のために」あるいは「どのように使うのか」を明記しましょう。

10. オフィスアワーは必ず時間指定しよう！

「いつでも良い」＝「いつもだめ」です。いつでも良いと書いてあるから行ってみたら、「いつも」いない。アポも取らず、教員がたまたまお昼に出かけている間にやってきては同じことを繰り返し、陰で嘆いている学生がいます。時間を指定して必ず研究室にいるようにしましょう。その時間が都合の悪い学生がいる場合は、必ずアポを取るよう指導しましょう。

●研究室に来る課題設定を

研究室に教員を訪ねるのは、学生にとって意外に敷居が高いようです。研究室訪問をしなければ終わらないような課題を課して、授業開始後早い時期に一度研究室に来させるのがよいでしょう。

11. 授業計画の変更は大歓迎！

「最新のトピックを扱いたいから、前年に立てた計画通りに授業はできない」とおっしゃる教員が少なからずいます。最新の問題や情報に基づいて授業内容を「改善」していくのは大いに結構ではないでしょうか!! 「授業改善アンケートに『シラバスに即して授業が進められた』という項目があるじゃないか!」とおっしゃる方も。シラバスどおりであることと、授業計画を変更することは別問題です。シラバスを書いた後、諸々の事情により授業計画を変更せざるを得ない場合があると思います。その場合は、オリエンテーション等を通じて新しい授業計画を示し、必要なら書面で配布したりインターネットを利用するなどして受講生に通知しましょう。その際なぜ計画を変更するのか、学生の学習上の利益になることを説明することも重要です。

「シラバスに即して」とは、授業計画通りと言うことではなく、授業の内容や評価方法など、シラバスに書かれている全般的なことを指しています。授業改善アンケートを実施する場合も、学生にその旨通知しましょう。

学生が勉強を始めるシラバスを書こう！

シラバスを情報の宝庫にしよう！

■ 高知大学総合教育センター・大学教育創造部門

シラバスを読んでいるのか？

●読まずに履修登録している実態

そもそも学生はシラバスを読んできているのでしょうか？残念ながらほとんどの学生は読んでいません。読まない学生が悪いのでしょうか？

●読んでも役に立たないのか？

そもそもシラバスは学生にとって有益な情報を与えているのでしょうか？シラバスを読んだ学生が、「授業を受けたら全く違っていた」などと言っているのを聞くことがたびたびあります。シラバスが実際の授業内容を伝えていないのでは、本来の役割を果しているとはいえません。シラバスを読むと得をする、読まないと損をすることがあれば、学生も目を通すようになるでしょう。重要なことはできるだけ授業の具体的な内容がよくわかるように書くことです。シラバスを授業開始前からの良いコミュニケーションツールとすることを意識しましょう。

●履修登録のオンライン化

GAKUENの更新に伴い、来年度2学期からシラバスシステムが生まれ変わります。新システムでは履修登録がオンライン化される予定です。これが実現した場合、シラバス検索から履修登録をするようになり、ちらっとでもシラバスを見ないと履修登録ができなくなります。と言うことはすなわち、シラバスを見ないと卒業できなくなります。このチャンスにシラバスを授業の有益な情報源にしましょう。

1. 担当授業の位置付けは明確ですか？

共通教育科目は科目区分ごとに目標があります。教

養科目と基礎科目では当然目標が異なります。また学部ごとにカリキュラムがあり、それぞれの学部教育科目の教育コースにおける位置付けが決められていることでしょう。今からシラバスを書こうとする科目の位置付けは明確ですか？

高知大学、共通教育、各学部および各教育コースはそれぞれ人材育成目標を持っています。どの授業科目も例外なく、この人材育成目標の中の重要な一部分を担っています。これらの目標を今一度、確認しましょう。その上で担当科目の位置付けや担うべき範囲、レベル、目標等を明確にしましょう。

2. 成績評価が気になる？

●「楽勝科目」を教える上級生

履修登録前の期間に、先輩が教室にやってきて時間割作成を手伝ってくれるそうです。学生の方が教員より、履修登録の際の実際の問題をよく理解しているようで、役立つそうです。ところが聞きもしないのに「楽勝科目」を示してとるように推奨することもあります。ここで新入生は最初の洗礼を受けることになります。すなわち「大学とは楽に単位をとって卒業するところらしい」。このため要領を得た学生はとりあえず「評価」の部分に目を通して期末試験か、レポートか、それとも別の方法か確認します。

この傾向を利用して「評価の観点と方法」をしっかり書きましょう。多面的な評価方法を採用し、何を、どの方法で評価し、どの程度のウェイトを置くのか明記しましょう。

3. 「学ぶ目的」は学生を主語に！

「学習の目的」は「受講生は」が主語になるように、

学生の学ぶ目的を書きましょう。多少抽象的でもかまいません。受講生は、この授業をとることによって、何を身につけることを目的とするのかを示しましょう。

目的が目標と異なるのは、人材育成の目標に照らし、この授業がどのように位置づけられているのかを明確にする点にあります。したがって、たとえば「(受講生は) ……するために……を理解する」というような文章にすると分かりやすいでしょう。

●「目的」に使用する動詞(例)

知る、認識する、理解する、感ずる、判断する、価値を認める、評価する、位置付ける、考察する、使用する、実施する、適用する、示す、創造する、身につける

4. 「学習の目標」は具体的に

「学習の目標」には、やはり受講生を主語にして具体的に実現可能な目標を示しましょう。「目的」との違いは具体的に分かりやすいこと、評価の観点と直接結びつけられることです。必ず1文中に1目標をかきましょう。また学生が時間外の学習をしやすいように、何を、どこまでできたら合格とするのかを示しましょう。

例1：(受講生は) 教科書に出てくる物質の IUPAC 名を、英語で書けることを目標とする。

例2：(受講生は) 教科書に出てくる化学反応の反応機構を、電子の流れを表す矢印を使って書き表せるようになることを目標にする。

このように書けば、1学期間の授業で非常にたくさん目標が設定される場合があることに気付くでしょう。受講生にとっては具体的であるほど取り組みやすくなります。目標がたくさんあれば、たくさん書いてあげましょう。

●ラーニング・アウトカムズを意識する

Learning Outcomes は、J. Moon により以下のよう定義されています。

「学習者が一定期間の学習を終了した時に知り、理解し、できるようになることが期待されることについ

て表明されたもの。」

さらにこれは具体的に観察、測定が可能で、学習者にとって重要でなければならないとされています。したがって学習の目標を決める際に Learning Outcomes を意識して観察容易な観点、学習者が身につけるべき能力を示すようにしましょう。

●「目標」に使用する動詞(例)

知識	列挙する、述べる、説明する、分類する、比較する、関係づける、解釈する、予測する、選択する、一般化する、応用する、適応する、評価する……
態度 習慣	行う、助ける、コミュニケーションする、協調する、示す、表現する、始める、参加する、答える、配慮する……
技能	感ずる、始める、実施する、工夫する、行う、創造する、操作する、調べる、準備する、測定する……

5. 目標にリンクした授業計画を

授業計画はできるだけ詳細に書きましょう。可能なら1回ごとに書くのがよいでしょう。各回のテーマ、内容の他、小テストやレポートを課す場合はあらかじめ予定を示しましょう。また毎回の学習のポイント、時間外学習のポイントなど、受講生の学習を習慣付けるために必要な情報をどんどん書き加えていきましょう。

各回のテーマが目標のどの部分に相当するか、関係が分かるように書くことも重要です。目標にリンクすること、すなわち評価と関係づけられるはずだからです。各回のテーマで、何を学習することによって高い評価を得られるか分かるように、関連を意識して書きましょう。授業計画中に目標や評価の観点をはっきりと明記しても良いでしょう。

6. カリキュラムマップとは?

たとえば共通教育であれば科目区分ごとの、学部教育においては各学部の人材育成目標に従って、学生が身につけるべき能力の項目が定まります。次に担当授業科目では、この中のどの能力をどの程度身につけることを目標とするか、という位置付けを明確にしたも

のがカリキュラムマップです。

たとえば、下の例のように、この授業で力を入れる度合いを○や◎で表すと、あるいは要求する能力のレベルを「初級」、「中級」、「上級」などで表すことができれば、受講生は、自分の将来に向けてこの授業でどのような能力が見につくのか、4年間の学習の中で自分がどのような段階にあるのかを知ることができず。もう一度下の表をご覧ください。

身につけるべき知識・能力は人材育成目標に明記された項目です(1)。これ以外にこの分野での特有な項目があるかも知れません(2)。この表を縦に見たとき、この分野で身につけるべき知識・能力として I、M、P がそろっているように作る必要があるでしょう。

7. 単位の実質化を前提に!!

●英語表記が必要

留学等海外の大学での単位認定や単位互換等の問題が生じています。授業科目名、副題、キーワードは日

本語に英語を併記してください。

●海外の大学での単位認定

各国それぞれ「単位」に関する決まりがあり、実質化されているようです。「有機化学」という科目で2単位取得したとすると、それにふさわしい質と量の教育を受けたことを意味しています。日本もほぼ同じ基準があり、それが「単位の実質化」です。これによれば、90時間の学習を伴う内容に対して2単位となっています。通常講義の場合、授業時間はこの内の30時間と計算されていますから、残り60時間の学習が必要です。もし、これを全く必要としない授業内容であれば、2単位科目として成立しません。

海外へ留学する学生、進学する学生もいることから、諸外国での単位認定のためにも単位の実質化をしましょう。すでに他大学と単位互換の締結があり、どこかの大学がきわめて厳格に実質化している、あるいは逆に実質化にほど遠い状態であるというような格差があるようでは問題です。信頼関係を築くためにも単

カリキュラムマップ(例)

科目名	(1)					(2)		
	自分で考え行動する力	コミュニケーション能力	表現力	論理的思考力	チームで働く力	専門知識	実験技術	立体的認知力
化学の基礎			I	I		RE		I
物質の科学						RA		I
サイエンスリテラシー(化学)	I	I	I	I	I	RA		I
化学概論	I		I	M		M		M
基礎化学実験	M	M	M	M	M	M	I	M
基礎有機化学			M	M		M		M
有機化学			P	P		P		P
有機化学実験	P	M	P	P	P	P	M	M
有機化学演習	M	P	P	P		P		P

RE:補習授業, RA:教養, I:初級, M:中級, P:上級 (1) 人材育成目標に基づく項目 (2) 分野の共通項目 (3) 項目ごとに I, M, P がそろっている (4) (1), (2) とともにシラバスに書く